

意見書

2006-8-7

武庫川流域委員会  
松本 誠委員長様

委員 谷田 百合子

粗度係数について

粗度係数は洪水実績から求められた逆算粗度係数を採用すべきと考えます。

平成16年23号台風による洪水は計画規模1/100に近い洪水です。(引き伸ばし率1.4) 基準点甲武橋の流量は2900 t/sと報告されています。このときの水位は高水敷を被る程度であり、HWLまでかなりの余裕がありました。

また、阪神電鉄橋梁地点での水位は、阪神電鉄が超音波水位計を設置して橋梁下端まで2.4mもの余裕があったと報告されています。この地点の直上(河口から3km)は流下能力が最小で2600 t/sとされています。以上のことから実際の流下能力は少なくとも400-500 t/s上回ると考えられます。これは流量算定にもちいた推定粗度係数が高い値になったからです。河床は固定したものではなく各洪水によって変動する。

(河道の構造、横断構造物、河床材料、流速など)粗度係数は一様に計算値として捕らえることはむづかしく、実績値からの逆算粗度係数のほうが実情を表しています。

今の時点で疑問の多い推定粗度係数を採用するのではなく、計画規模に近い洪水を更に1-2回実績調査の上、逆算粗度係数を採用すべきと考えます。

なお、流下能力が最小地点、河口から3km地点の粒度分布調査を実施、粗度係数を再検討してください。

以上